

## 《書 評》

小野塚 知 二 著

### 『経済史 いまを知り、未来を生きるために』

2018年 有斐閣

本書の表紙絵（T.C.ゴッチ「Destiny」）は類書にはない一風変わったものである。表紙のそでの説明によれば、それは運命の女神が、不毛の草地で戯れるカップルに向かって、「そろそろ目覚めて、あなたがたの責任を果たしなさい」と告げている様子を描いたもので、過去の自然の蓄積物の上に栄える産業文明に対して「覚醒」を求めるといふ、19世紀末頃から盛んに取り上げられたテーマにつながる作品であるという。そしてここでいう「覚醒」とは「滅び」の予感であるとも示唆されている。

本書は小野塚氏の専門的な研究書ではなく、大学生にむけてなされた講義などをもとに書かれた教科書としての一面を持つ書物であるが、例えばインターネット通販大手のアマゾンのブックレビュー（カスタマーレビュー）を見ると思いのほか多くの感想が寄せられており、通常の学生向けの教科書とは異なる広い読者からの反響を呼んでいるように思われる。恐らくは、表紙絵にも象徴的に示されているような小野塚氏の、類書にはない現代の閉塞的な状況をふまえたアクチュアルな問題関心が、そのような反響を引き起こしたのではないであろうか。

小野塚氏よりも前に東京大学経済学部で経済史を担当していた大塚久雄が、戦後の日本の課題を西洋経済史研究の課題とうまく重ね合わせることで多くの読者を獲得したことはよく知られている。しかしその大塚の執筆した教科書『欧州経済史序説』（『大塚久雄著作集』岩波書店、1969年、第二巻所収）は主として西洋近世のみを分析対象とするものであった。その後も多くの西洋経済史の教科書が執筆されてきたが、その多くはより新しい時代までを対象とし、より新しい研究動向をふまえたものとなっていったかわりに、大塚のような明確な問題意識を希薄化させていく傾向にあったように思われる。

もちろん個々の研究者はそれぞれの研究分野において独自の問題関心に基づいて研究を行っている。しかし研究の精緻化の中で、個人がカバーできる研究の範囲というものはより狭まっていく傾向があり、かえって全体を論じることは難しい作業となっていくかざるを得ない。教科書は結果的に異なる問題関心を持つ多くの研究者の共著となっていく傾向が強くなっていった。近年グローバル・ヒストリーの名のもとに（ある種の方法的な特徴を持った）「大きなものがたり」が注目されてきてはいるが、日本の研究史においては、経済史研究の「大きなものがたり」を支えてきたマルクス主義の影響力が後退するにつれ、それにとってかわったのは主として精緻な実証主義であり、明確な問題意識に支えられた「大きなものがたり」を語ることは難しくなっていく傾向にあったように思われる。

最新の研究成果を取り入れつつ、研究者がそれぞれの時期の地域・国の経済史を教科書として叙述することは知的に誠実な作業であり、否定されるべきものではない。小野塚氏も指摘するように、むしろ通常教科書には「現在の研究状況で常識的に支持されている知見を要領よく紹介する」（vii頁）ことが求められる。しかし、研究者を目指しているわけではない一般の学生からすれば、何のために、よその国の、昔の出来事を学ばなければならないのか、という疑問が解消されなければ、教科書の内容は単位を取るためだけに一時的に記憶し、そして試験が終われば忘れ去られるだけの色褪せた知識の集積になってしまう恐れがある。小野塚氏の『経済史』が反響を呼んだのは、小野塚氏が本書の執筆に際し、上述のような教科書に求められる課題以上に、あらためて何のために経済史を学ぶのかを明示し、小野

塚氏なりの現在と未来を見据えた「大きなものがたり」を語ることにエネルギーを注いでいるからではないであろうか。本書が経済史の「通常の入門書ではありません」(vii頁)という断り書きをつけた上で、「通常の大学教科書のシリーズから外して、単行本として刊行」(541頁)されている背景にはそのような事情もあるのではないかと推察される。

前置きが長くなったが本書の構成は以下の通りである。

はじめに

序章 経済史とは何か

第Ⅰ部 導入 経済, 社会, 人間

第1章 経済成長と際限のない欲望

第2章 欲望充足の効率性と両義性 ―支配と自由―

第Ⅱ部 前近代 欲望を統御する社会

第3章 総説 ―前近代と近現代―

第4章 共同体と生産様式

第5章 前近代社会の持続可能性と停滞

第6章 前近代の市場, 貨幣, 資本

第Ⅲ部 近世 変容する社会と経済

第7章 総説 ―前近代から近代への移行―

第8章 市場経済と資本主義

第9章 近世の市場と経済活動

第10章 近世の経済と国家

第11章 近世の経済規範

第12章 経済発展の型

第Ⅳ部 近代 欲望の充足を求める社会・経済

第13章 産業革命

第14章 資本主義の経済制度

第15章 国家と経済

第16章 自然と経済

第17章 家と経済

第18章 資本主義の世界体制

第Ⅴ部 現代 欲望の人為的維持

第19章 近代と現代

第20章 第一のグローバル経済と第一次世界大戦 ―繁栄の中の苦難―

第21章 第一次世界大戦とその後の経済

第22章 第二次世界大戦とその後の経済

第23章 第二のグローバル化の時代

終章 経済成長の限界と可能性

あとがき

まず、はじめにでは、経済史が現在(いま)を理解するための、それゆえ未来を展望し、構想するための有力な方法の一つである点が強調され、その理解のための手がかりとして、経済を成長させる原動力は何か、人類はいかにして十万年もの間生存してきたのか、人口増大を可能にする経済成長は具体的

にどのようにして起こったのか、という三つの問いがたてられている。

そして第Ⅰ部ではその問いに答えるための概念についての説明がなされる。問いにも出てくるキーワードは経済成長であるが、著者は法律や政治とは異なり、経済が量的に拡張するものとして捉えられてきたことを指摘する。そしてそのことを理解する手がかりとして、ヒトが他の動物とは異なり、際限のない欲望をその特性として有していること、それが経済活動の拡張の根本的な動因になってきたことを仮説として提示している。このような観点に立つと、経済とは際限のない欲望を実現するためのモノの領有、蓄積、生産、分配、消費、所有、交換などの人間＝社会の全過程と定義できる。そしてヒトは貨幣の発明によって生理的な欲求の限界を克服し、分業によってより効率的な欲望の充足を実現してきたのである。

このように本書においては、際限のない欲望というヒトの属性が経済の変化を分析するための重要なキーワードとなっている。そして続く第Ⅱ部では、前近代においては、際限のない欲望が社会的に統御されてきた点が強調されている。前近代においては欲望の充足のために共同性の維持が不可欠であり、そのためには自由意思による契約とは異なる、掟や身分などによって分業が編成される必要があった。ただしそれは当時の人々にとって必ずしも不自由と感じられた訳ではなく、是非を超えた疑われざる規範として存在していたことが指摘されている。なお、このような規範に規制された前近代社会は、一般的に停滞的ながら長期にわたって持続することができたが、中には古代シュメル文明のように経済成長への誘惑に屈して資源の枯渇を生み出してしまい、衰退した社会も存在したことが紹介されている。

第Ⅲ部では前近代から近代への移行の過程としての近世が論じられる。そこでは身分制・共同体を基礎とする伝統的社会から市民社会への人間関係の構成原理の変化、前市場社会から市場社会への分業の編成原理の変化、封建制から資本制への生産様式の変化が、地域差を伴いながらも進行していったと理解される。小野塚氏は、市場経済、資本主義とは何かについて丁寧に考察し、そのうえで商業革命や農村商工業の展開などの意義について説明を行っているが、結婚・家族形態の問題にも多くの紙幅を割いている点が特徴的である。

次の第Ⅳ部では個人の際限のない欲望が承認された時代としての近代が分析される。まずその変容が完了する画期である産業革命についてこれまでの論争を紹介したうえで、それが不可逆的かつ総合的な変化であったことを指摘している。そして産業革命によってさまざまな自然的制約の克服が可能になると、際限のない欲望の厳重な規制も不要となり、「市場経済の離床」が可能になったと述べている。第Ⅳ部ではこのほか、近代に確立した資本主義的な諸制度や資本主義の世界体制などについても説明しているが、特に目を引くのが資源問題への言及である。小野塚氏は木炭不足を石炭の利用で解決したコークス製鉄法や食糧不足を輸入で解消した自由貿易の例をあげて、近代においては結局問題の先送りが行われたに過ぎず、古典派経済学者たちが自然の有限性による将来の成長の限界を課題として認識していたことを指摘している。

続く第Ⅴ部では現代が扱われている。現代は際限のない欲望の充足（豊かさ）や自由という価値の重視において近代と共通するが、古典的自由主義から、「弱く劣った個人」を前提として強制的に「幸福」へと誘導しようとする介入的自由主義への転換という変化をもたらした。小野塚氏によれば東西冷戦もどちらの体制がより豊かな社会を実現できるかの争いに他ならなかった。そして冷戦の終焉は資本主義のグローバル化を加速させたが、その不安定性は克服できていないままである。

今日、介入的自由主義への批判的な言説としてネオ・リベラリズムが影響力を持っているが、それは社会保険や企業福祉などを前提としており介入的自由主義を克服する社会設計とはなりえていない。しかし同時に、近現代を支えてきた諸要素の衰弱も明白となっている。人類の経済活動が自然の自己調節能力を超えてしまっていることは地球温暖化などからも明らかだからである。

ではこのような出口の見えない状況の中で次代の構想を描くことは可能なのであろうか。終章ではそ

の手がかりが考察されている。小野塚氏ははじめにでの問いに答える形で本書の内容を再確認した後、新たに出口の問いとして、経済が今後も成長を続けることは可能か（成長のない資本主義は可能か）、文明の持続は可能かについて考察し、物財・エネルギー以外の面で成長できる資本主義経済を構想する必要性を強調して、非物財的な経済成長や資源争奪の回避の方法などの今後の可能性に言及している。本書の問題意識からすれば、もう少しこれらの点に紙幅を割いて小野塚氏の持論を展開してほしい気もしたが、歴史書に未来についての記述を求めるのではないものねだりというものかもしれない。

なお、以上の簡単なあらすじの紹介では触れることができなかったが、本書にはわかりやすい例え話や関連する蘊蓄が満載されており、それが読者をひきつけてやまない一要素となっている。先述の大塚久雄は講義で学生を引きつけるために落語を研究したと言われているが、本書において小野塚氏も読み物として読者を楽しませようとする努力を惜しんでいないと感じられた。

しかし本書にも不満がないわけではない。一点のみ指摘すれば、本書が「西洋経済史」ではなく、充分に西洋以外も対象に含んだ「経済史」の教科書たり得ているのか、という点が気になった。本書においては小野塚氏の博覧強記ぶりが遺憾なく発揮されており、時に日本であったりアジアであったり、さまざまな時代や地域についての言及が行われている。しかしながら一方で本書が焦点を当てている経済社会のモデルは明らかに西欧の経験に基づくものであるとも感じられた。小野塚氏がイギリス経済史を主たる専門分野としていることを考えれば当然のことではあるが、ややこの問題への目配りが少ないように感じられた。

とはいえ、本書がそのような不満を補ってあまりある魅力的な「大きなものがたり」を提起していることは間違いない。本書が学生だけでなく多くの読者に読まれ、議論をまきおこすことを期待したい。

〔河合 康夫〕

#### 書評執筆者

河合 康夫 武蔵大学経済学部教授